



リステラス星圏史略
新資料ファイル

1-2



『ヤツリーダムのお話』

2

(執筆一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

目次

| | |
|--|----|
| 【 移転 の お知らせ 】 | 1 |
| 『 ヤツリーダム の 物語 2 』 | 2 |
| 『 ヤツリーダム の 物語 2 』 (砂魚宇宙) (てか、めも。) (2017年6月30日) | 3 |
| (続き) (2017年11月3日) | 5 |
| 奥付 | |
| 奥付 | 11 |

【 移転 の お知らせ 】

- ☆
- ☆ 超～大幅に！ 加筆&改稿した2023年版、
- ☆
- ☆ こちらに移転しました。
- ☆
- ☆
- ☆ 『 試験に出る 宇宙史 』
- ☆
- ☆ ... 《リス テラス 星圏》史略 概論
- ☆
- ☆
- ☆ <https://novelpia.jp/novel/3862>
- ☆
- ☆

=====

彼等のその後の物語。

『ヤツリーダムのお話 2』

『ヤツリーダムのお話 2』

『ヤツリーダムの物語 2』 (砂魚宇宙) (てか、めも。)
(2017年6月30日)

<http://85358.diarynote.jp/201706301510338624/>

<http://85358.diarynote.jp/201706301510338624/>

2017年6月30日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201706301510338624/>

ある嵐の翌朝、太湖のほとりの泥溜まりのほとりで、群れからはぐれたらしい四ツ足の仔が、しきりと鳴き泣きしているのを、通りすがりの二本足の女が聴きとめた。

ちょうど孕んでいた女は幼子が母を求める嘆きを見過ごせず、さりとして辺りを見渡しても春の大雨の後の大增水のさらに大嵐であたり一面の水びたし。その仔が元いた沼が何処であったかなど、とても見分けられそうにない。

しかたなく女は片手でひょいとその仔をつかむとすたすと自分の家まで戻り、一番大きなたらいに泥水を満たしてその仔を放ち、たまには体を干して日当たりで休めるようにと板を斜めに渡して、泥一面の太湖のほとりでは水草も埋もれて食餌もとれていなかったらうと、海藻の干したものを水でもどして喰わせてやった。

がつつと喰らったその仔は腹がくちくになるとようやくに鳴きやんで、「...あんじゃ〜!」と、少しようすの違う声をあげ、やがて安心したのかくうくうと寝入ってしまった。

女は微笑んで、増水のひいて仔でも生きられるようになるまではのつもりで毎日まいにち、水草をもどしては口元に運んでやったのだった。

(未)

(歯医者いってきまーす☆)

(続き) (2017年11月3日)

<http://85358.diarynote.jp/201711032159204669/>

(続き) (2017年11月3日)

やがて月満ちて女は子を産んだ。からだの辛いあいだは親族や近在の者が入れ替わりやってきては赤子の元気そうな様子を誉め、かがめない女に代わって四ツ足の仔にも餌をやり、泥水を替えてやっては帰っていった。

女は不自由なく歩けるようになるとやがて、まだまだ軽い乳飲み児を背負い、もうずいぶん大きくなった四ツ足をえっこらさと抱え上げて、出水のひいたもとの大河のほとりにまで運んで行ってやった。

ところが四ツ足はいやがって女から離れなかった。

「えんにゃー！ えんにゃー！ えんにゃー…ッ！」

…褐色の四ツ足が、どうやら自分のことを実の母と思いこんでしまったらしいと気がついて、女は笑ってため息をつき、またまたえっこらさと抱え上げて家まで戻り、今度は家の前の小さい沼川に、ほいっと四ツ足をはなしてやった。

「もう盥の中では狭いだろう。ここならいつでも逢えるよ」

聞き分けたのか、四ツ足はおとなしく、少し嬉しそうに泥沼のなかへ泳ぎこんでいて、まだ短い尾でぱしゃりと水を叩いた。

それからは餌は自分で水草を摂るようになったが、朝に夕に、陽が昇れば女を起こしに来るし、陽が沈めば女におやすみの挨拶をしに来るのであった。

女はしばらく考えて、二本足の息子には双葉と名付け、四ツ足の息子には、四つ葉と名づけた。

双葉は四つ葉ほどには成長が速くなかったが、人間の子らしい速さで元気にすくすく育ち、やがてすこしでも目を離すと四つ這いでどんどん遠くへ行ってしまうようになった。

普通なら気を抜けないところだったが、なにしろ水辺に墜ちれば四つ葉がすぐに岸边まですくい上げてくれるし、崖から落ちそうになれば四つ葉が叫んで知らせてくれるして、女はずいぶんらくをさせてもらった。

「こういうのも乳兄弟って言うのかねえ？」

いつでも一緒の一人と一匹を微笑ましく眺めて、近在の者らは笑いあった。

やがて誰も覚えがないほどの大雨と大水が続いた。

噂では白鱗の魚人族がカとミと秘術を使い、人間の帝国を滅ぼさんと大地の水没を謀っているとのことだった。

誰もなすすべもなく沈みゆく畑を前におろおろし、流される家を後に必死で逃げた。

女たちの集落も水に呑まれた。

泣き叫びながら人間たちは渦にまかれ、泥に沈んだ。

悲鳴は天に響いた。

「……………うんにゃぎゃぎゃ、ぎゃぎゃぎゃッぎゃぎゅ〜ッ…！！」

誰もそれまで聞いたことがなかったほどの大きな大きな吠え声が、四つ葉の喉から溢れた。

二度、三度と、それは天に轟いた。

「……………うげろーーーーーっぶ！」

遠くから、また反対側から、応える叫びがあがった。

物凄い速さでいくつもの小津波が近づいてきた。

津波と見えたが、それは物凄い速さで泳ぎ寄ってきた、たくさんの、たくさんの、四つ葉の仲間であった。

仲間たちは四つ葉の村の人間たちを一人残らず背に載せて、泳いで泳いで泳いで、まだ乾いていた、残りの小さな島地に載せた。

「……………やっ、ちだも！」

(なんて御親切に！)

女は涙を流して感謝した。

それからは《ヤチダモ》が、四ツ足たちの新しい名前になった。

双葉と四つ葉は仲良しのまま元気に育ち、それぞれの嫁をもらって、子を産み育て、一族同士は互いに仲良しのまま、末長く栄えた。

奥付

奥付

リステラス星圏史略

新資料ファイル

1 - 2

『ヤツリーダム物語』

2

../../book/115854

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/115854

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

リステラス星圏史略 新資料ファイル 1-2 『ヤツリーダーダムの物語』 2

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
